

面に志した男がある。二年前に逢つた時彼は頻りに人生の意味といふことを語つた。自分には固より解らない。又解らうともしなかつた。彼は市ヶ谷とか牛込とかの見附を始終往復したといつた。あの見附の附近には大雨の後などにはよく土手の半腹が墜落するのを見る。それから土手の榎の木には鴉がとまる。落葉の後には寄生木のホヤがわからさまに見える。少年が空氣銃を持つてそこらを彷徨ふ。或日そこを過ぎると少年の空氣銃が一羽の鴉を打つた。鴉はすつと落下した。土手に近づいた時鴉は最後の力を振はんとして羽を動かしたが其體は枯芝の中にどさりと大きな響を立てた。少年が駆けよつて攫へた時鴉は悲しい聲をあげて鳴いた。此の見附の現象に何等かの意味があるやうに感ずるといふので

あつた。自分はそれは引力の作用だといつた。地殻の一部に空虚を生じた時陥落といふ現象の生ずるのは當然のことである。ホヤの木があつても何でもないぢやないか。鴉が落ちた時に大きな響を立てたのは落下率が加はつたからだと半分は戯談にいつた。此でも自分は天然を愛するのと位は知つて居るのだといふと彼は天然の皮相を見たつて何になるといつた。去年の夏に逢つた時彼は又いつた。此の間或る不幸な女に逢つて其經歷を聞いた。女は泣いて訴へた。自分は其時女に向つて徒らに慰安の道を求めるよりも悲めるだけ悲むで運命に服従しなさい。さうすれば生存の意味が深くなる。それと同時にあなたの値打が増すのだといつてやつたといつた。自分にはどうしても分らむ君等はつまらぬことに苦勞

したものだと言ふいつてやつた。言ふすると彼は君は百姓のことを知つて居るだらうといふから勿論だといつた。百姓が作物を栽培することに偽があるかといふからそれは神聖なものだといつた。百姓のすべては努力に在るぢやないかといふから努力の最高位に居るものだらうといつた。言ふすれば神聖なる努力だらう。百姓は苗の一把は措むまい。然しながら此を田に植えた時其一株を踏まれても怒るだらう。穂が出て花が咲いた時は一夜の嵐にも心を勞するだらう。稲が竹竿に掛けられた時更に之を惜むの度は加はるだらう。粃が玄米になつて玄米が更に白米に變じた時はどうである。白米の一粒だに惜まるゝ所以のものは百姓の力が段々そこに加はるからである。即ち神聖なる努力の値打である。物質の値打

ではない。粃から言ふして白米に至る程物質は却て減却しつゝあるではないか。神社であつても佛閣であつても莊嚴の氣人を壓するものは之を造營した各の人及び爾後の繼續せる長い時の間之に奉仕する人々の敬虔なる態度の具體的表現である。人の力が人を壓するのである。君は態度といふことが解らぬと見える。研究する目的物の尤も大なるものは天文の學だらう。小なるものは檢微鏡の學だらう。言ふして兩者の間に値打の差別があると思ふか。そこに差別を見出さぬのは目的物に對する研究者の敬虔なる態度の全く同一なるが故である。學問といふものは神聖なる努力の結晶であると彼はいつた。自分はそれはそれに相違ないが、同一の努力をしても成功するものとせぬものとが有るぢやないかといつた

ら、それは天分の問題だ、各自に天分を盡すまでのことだ、其盡すといふ處が神聖なる努力だ、其態度に値打が存在して居るのだと彼はいつた。それぢや下手に生れたものは損ぢやないかといふと、損益といふ語はそんな處へ用ゐるものぢやないといつた。彼は又十日徒手安坐して之を一年半年若くは一ヶ月後に回顧してそこに何物がある。唯一日の旅行で十分である。努力は孰れに多い。追憶の分量が孰れに多い。さうして其旅行に事件が加はれば加はる程、苦痛が加はれば加はる程、其事件や苦痛に對して旅行者の心理の働きが波打てば波打つ程そこに分量も意味も値打も生じて來るのぢやないか。意味ある人生、値打ある人生を微細な一點にも發見するのが我々の本領である。さうしてそれに努力すること

に依つて我々の意味も値打も増して來るのだといつた。自分は少し茶化して聞いて居た。小學校の生徒にでもいつて聞かせるやうにいふのが面白くなかつからである。少年時代から隔てない間柄ではどうも頭にはひり憎いものだ。だがこんなことも其後はすつかり忘れて居た。佐治君の嘶を聞いてふつと思ひついた。どうかすると廿年も前のことをふつと思ひ浮べることがある。心理學者は此の状態を何とかいつて居るのだらう。佐治君を見るとひどく自分がちつばけな様に見えてならぬ。大學出身は幾人か見た。佐治君のやうな人には逢はぬ。それで居て佐治君は絶えず家庭の煩悶ばかりして居る人だ。狭い一局部に限られて居る人に過ぎないのだ。そこには何があるのだらう。自分はぐたりと成つた儘起きられ

なかつた。

翌日佐治君は生徒に告別の挨拶をして早く歸つた。自分は放課後鬼怒川の上流の寫真二三葉を懐にして佐治君の下宿を訪うた。荷物は大抵通運に託したといつて室内がからりとして鞆一つだけが残されてあつた。佐治君は鞆の中から白い晒しの切を出して茶器を拭つて茶を侷めた。自分が寫真を出して見せると佐治君は熟視した。鬼怒川の上流が天下の絶勝であることや、殊に豪雨の後に於ける水勢の劇甚なことや、自然の絶大なる威力が峽谷の民に迷信を抱かせて居ることや種々なることを語つて見た。佐治君は

「私は自分の境遇と性情とがかういふ深山を跋渉することを許さないだ

らうと思ひます。あなたに依つて此の大觀に接することを得たのを感謝致します。私は固より美を好むものであります。美術といふものゝ如何なるものなるかも學びて居ります。然し私の心は一方に非常な薄弱なものであります。錐を以て穿たねば痛みを感せぬ程強烈な刺戟にも堪へて居ます。私は現在の畫家の描いた多くの誇張した山水畫を見ることを好みません。誇張が繪畫の要素の一つであることは私も信じて居ます。然し現在多くの繪畫は誇張に伴ふ浮薄と虚偽との悪感を催さしむるのであります。だがあなたの寫真は私の前に眞實といふものを現はしてくだすつたのです。眞實は私に於て第一の滋味であります。」

といふ意味のことを語つた。

「鬼怒川の分ならば幾らもありませんが宜ければ今夜印書して置ませう。明日會へお出掛の序に一寸寄つて見て下さう」

自分は更に

「どうかあちらへ御出に成つたら勉めて郊外の散歩でもなすつたらどうですか、あなたの健康は必ず恢復されるに極つて居ると思ふのですが」と極めて普通なことをいつて見た。

「御忠告に従ふやうに心懸けせまう」

佐治君はばさりとしていつた。

次の日は日曜日であつた。職員間には佐治君に對する送別會が催された。自分は昨夜印書に時間を費したので起きたのは十時であつた。空は

からりと晴れて狭い庭のコスモスの花が氣輕相に見えた。自分は水洗した印書を縁側へならべ干した。それが乾いたので自分はガラスの定規で端を切つては臺紙を貼りつけた。そこへ佐治君が訪ねて來た。佐治君は庭から通した。座敷のうちには雜多の寫眞や古い臺紙や新聞紙やこつたに散亂して居た。潔癖な佐治君は坐るに快くなかつたのであらう。此日は自分の妻は同僚の細君同士に何か寄合があるとかで不在であつた。自分は冷えた茶を侷めた。佐治君は箱からぶちまけてあつた寫眞を一枚々々と見て居た。自分は其間水洗がよく出來てなくても變色することや、糊が悪くても矢張り變色するといふことやそれから此の貼り附けることが米國では一つの技術と見做されて居ると杯を語りながら一心に手を動

した。時間が大分経つた。日が斜に射し掛けて来たやうである。自分の手もとも薄闇くなつたかのように心得た時立關でおとづれる聲がするやうに思はれた。

「どなたかお出のやうですが」

佐治君は注意してくれた。

「こんにちは」

といふ低い叮嚀な聲である。自分は其儘立つて見た。庭の竹垣からすく／＼と立つた隠氣な赤いコスモスが一杯に日を浴びて居る。其蔭にぼんやり立つて居るのが見えた。出て見るとみすばらしい爺さんが何か天秤棒を卸して居た。

「何だい」

自分はいつた。

「へえ、鱈ですが、これつきりで、安く致して置きますらか………」
哀れつばい爺さんである。

「幾ら目あるか掛けて見ないか」

自分は財布を出しながらいつた。爺さんは腰へ挿した秤を出して籠を引つ掛けて秤の棹を目よりも高く揚げた。

「おい爺さんそれちや餘ンまりはねるぞ」

「へえ／＼」

と爺さんは少し分銅を動かす。どうも變である。爺さんはやがて

「旦那どうぞ見ておくんなせえまし」

自分へ秤の目を讀めといふのである。爺さんは又自分が出した小籠へ鱈をわけて更に濡れた竹籠を掛けてさうして正味が幾ら有るかと聞くのである。

「二百四十五匁だそれで相場は幾らだい」

「へえ、六掛ですが今日は荷ばたきですから五掛五分の勘定でようがす」

「六かしい勘定だな、十三錢四厘七毛五朱か、爺さんそれぢや分るまい、十三錢五厘やらう、さあ廿錢銀貨だせ此は」

爺さんは銀貨を受取つて暫く目の近くへ持つて行つてへりをこすつて

見たりして穢い財布を空に成つた籠から出してざらざらと錢を手の平へまけた。

「旦那どうぞこれからお剩錢だけをとつて頂きてえもんですが」

「お前私に取れといふのか、それぢや六錢五厘だよあゝもうとつたよ」

爺さんは文久錢の交つた小錢を又ざらざらと財市へ入れて長い紐をくるぐと絡んだ。

「まあお珍らしい、あなたお出下すつたのでせうか、大層遠方へお出でなさる相ですが、……そこへお立たせ申してどうしたんでございませう」

妻の聲で挨拶して居るのを聞いてふと見ると妻は二人の子を連れて歸

つた来た處である。何時の間にか佐治君が竹垣の側に立つてこちらを見て居るのである。送別會の時間が切迫したので暇を告げようと思つて出て来たのであつたらう。

「あなたまあ一寸おあがんなさいまし、お茶でも召し上つて下さる」
妻はお世辭をいつて居る。自分は氣がついたから

「どうもうつかりして居てお迷惑でしたらう、我は寫眞を二三枚仕上げてあとから行きますからどうか一足先へ行つてくださる」

「さつきからお出でくださったのでせうか、私は唯今お出でになつたばかりだと思ひました」

妻は佐治君へ挨拶しながら自分の方へ近づいた。妻に抱かれた子は生え

はじめた白い齒を出して佐治君へ向つて兩手を振りながら母の手の上で立つたり屈んだりして嬉々として騒ぐ。

「本當に此の子は人怖ぢがないのですから、まあどうしたもんでせう此の容子は」

佐治君へ挨拶して妻は

「今日も奥さん方で大笑ひなのねえ」

と獨りでいつた。さうして自分を見て笑ひながら

「あなた厭だ、小笠なんぞ持つてどうしたんでせう」

妻の腰にくつゝいてた次男は小笠の中を見せるとせがむ。小笠を次男の頭へ持て行くと鱒の水がぼたりと垂れる。首を縮めて甘えた聲を出し

て騒ぐ。そこらの子供と遊び暮した板面者がまだ一人門から駆け込むだ。下駄を一間もあとへ飛して駆けあがつた。佐治君はまだ去らずに居る。

「いま鱈を買つた所さ」

自分は爺さんのことを妻に語つた。

「お爺さんお前さん眼が悪いの」

妻は改まつて聞いた。

「へえ、わしも近頃すつかり見えねえもおんなじに成つてしめえまして」
「そんなことでお前さん胡魔化されやしないかね」

「結構これ出せえすりや煙草錢にや成りますからね、難有えもんでがす。且那方わしの顔を知つてますからなんだかんだ氣をつけてくれま

す、なわにわしがたべるだけなら日に二合もいりましねえから」

「能くねえまわ、お前さんそんな年に成つてもう商賣に出なくつてもいいだらうがねえ」

妻は同情してかう聞いた。

「わしもね息子は早く持たんでがすが一人前になつたと思つたらころりやられちやつて、倒見たのがわしのくされでがす、それから貫子をしましてね、廿五まで育て、うつちやられつちめえました、思ひ出すと忌々しいことですが、嫌を取らねえで置いたのが間違でがしたんべか到頭女に騙されて連れ出されてしめえました、足尾の銅山に稼いで居るつてちらつと聞いたこともありませんが、残せるやうなら結構ですが、残

りやしますめえ、食つて通るだけならこつちに居たつてよさ相なもんでがすが、此も好きぢやしやうがあせん、何も其女だつて女房にしちやなんねえといふ譯でもねえのに、わしもこれ息子が生きてりやこんな目にあ逢はねんでがすが、こりやいゝ野郎でがしたよ」

爺さんは天秤を杖に突きながら

「何でも實子でなくちや駄目でがす、自分の子供が寶でがす
泣くやうにいつた。」

「お前さん、足尾に居るのが分つたら連れて來たらどうなの」
妻はいつた。

「こんな厄介者の處にや戻つちやくれますめえ、わしもはあつくく〜忌

忌敷くつて、七十からに成つてかういに足腰がきかなくなつてからうつちやられちやみじめなもんでがす、わしも此で幾らも擔いちや出ねえでがすが夜は随分草臥れます、去年と今年ぢや大變な違げえでがす、争はれねえんもんです、一年たあいはれません、わしも何處でのたるか知れたこつちやありましねえが此も因縁だと覺悟はして居ますのせ……仕様があせん、私もはあ野郎がこたあ諦めましたから……」

自分も妻も唯爺さんを見て立つた。佐治君も竹垣の側に立つた儘凝然として居る。日は漸く闇くなりかけた。爺さんは見えな目目を睜つた。籠の繩を天秤の端へ絡むで暫く思案したやうにして居た。

「心得違げえせえなけりや憎い野郎ぢやあがあしねえが、なわに手前だ

つて碌な目にや逢はれぬえから駄目でがさあ」

爺さんは急に氣がついたやうに

「難有うござえました」

といつてのめり相な體へ天秤を擔いだ。

「また買つてあげるからお出よ」

妻は後から聲を投げかけた。

「へえ〜どうぞ」

爺さんは竹の杖を突いてよぼ〜と出て行つた。佐治君も續いて出た。二人の姿は程なく薄暮の中に隠れた。夜は段々濃く立つて居る自分を壓して閉ぢた。(終)



大正二年八月十五日印刷
大正二年八月十八日發行

現代文藝叢書
第廿八編(芋掘り)
實價金貳拾五錢

著作 長塚 節

發行 東京市日本橋區通四丁目五番地 和田 静子

印刷 東京市京橋區弓町二十四番地 金子 久太郎

印刷 東京市京橋區弓町二十四番地 三協印刷株式會社

發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地 春陽堂

電話本局 五十一
板橋日産 東京一六二七

著 平 草 田 森

街 字 十

(裝 表 楓 青 田 津)

著者の人生、殊に異性に對する理解と同情とが、漸くひろく成つた時代の作である。若し『自叙傳』を以て異性をアツキユースするものとすれば、これは異性を容すやうな心持で書かれたものである。彼は今や愛と憎みとを以て人生を見ず、靜に悲しみの眼を以て眺めやうとして居る。而もそれが彼の約束であるかの如くである。

錢 八 金 料 送 錢 拾 九 金 價 實

(版 再)

現代文藝叢書續刊豫告

德田秋江著

新古曲趣味

沼波瓊音著

七面鳥

江口福來著

菊五郎格子

著吉重三木鈴

小鳥の巢

(装表葉五口橋)

「想ふに今の日本の文壇にありて最ニ
ニクな地位を占むるものは三重吉氏
の右に出づるものは決してあるまい。
芳烈な情調や鋭敏な感覚や、而して其
に最相應しきフレキシブルな、觸れ、
ば血の出さうな筆致や、總て何人の追
隨をも許さないものである。此意味に
於て獨歩の境地を行く三重吉氏は、や
がて我文壇に最新しき使命を持つてゐ
る作家であると言へる。」

(ホト、ギス、文藝批評の一節、島田青峰氏)

實價金壹圓貳拾錢送拾二錢

(版 三)

著隆豐宮小

小 說 烙 印

(装表葉五口橋)

能く論ずる人は能く作る能はずといふ
か、开に盾の一面のみを見て他の一面
を知らぬ者である。詮するにカメレオ
ンを青色であるといふ斷見者たるに過
ぎぬ。評論家として鏘々の名ある豊隆
氏が、其しかつめらしい袴を脱いだ華
奢姿の創作家たる態度や如何、須らく
本書に看よ。

内 書 夜、か げ
容 芝居茶屋、烙 印

實價金八錢送拾八錢料金八錢

(刊 新)

松居松葉譯

脚本 十二世紀

(文藝協會公演)

思ふに此「二十世紀」の譯者としては、現に非常の精力家であつて健筆家でもあり、嘗て小説家でもあつて翻譯家でもあつた演劇の改良家、内外劇に精通した諸種の脚本作家でもあつてオペラの作詞家でもあり、經驗に富んだ舞臺監督でもあり、外國の風俗通でもありシヨ一の知人でもあり、婉曲露骨な嘲罵諷刺の達人でもある駿河町人子、松居松葉君ほど其任に適した人はあるまい。全くあるまい。(坪内博士序文の一節)

實價金五拾五錢送料六錢

(再版)

長田幹彦著

船客

(橋口五葉表裝)

品	小	曲	戲	說小
鎌倉より、	潮來より、	海の悲しみ、	舞姫 DAHJA、	船客、旅人
京都より	小樽より	濃	司祭と女	
		霧		

實價金八拾錢送料八錢

(新刊)

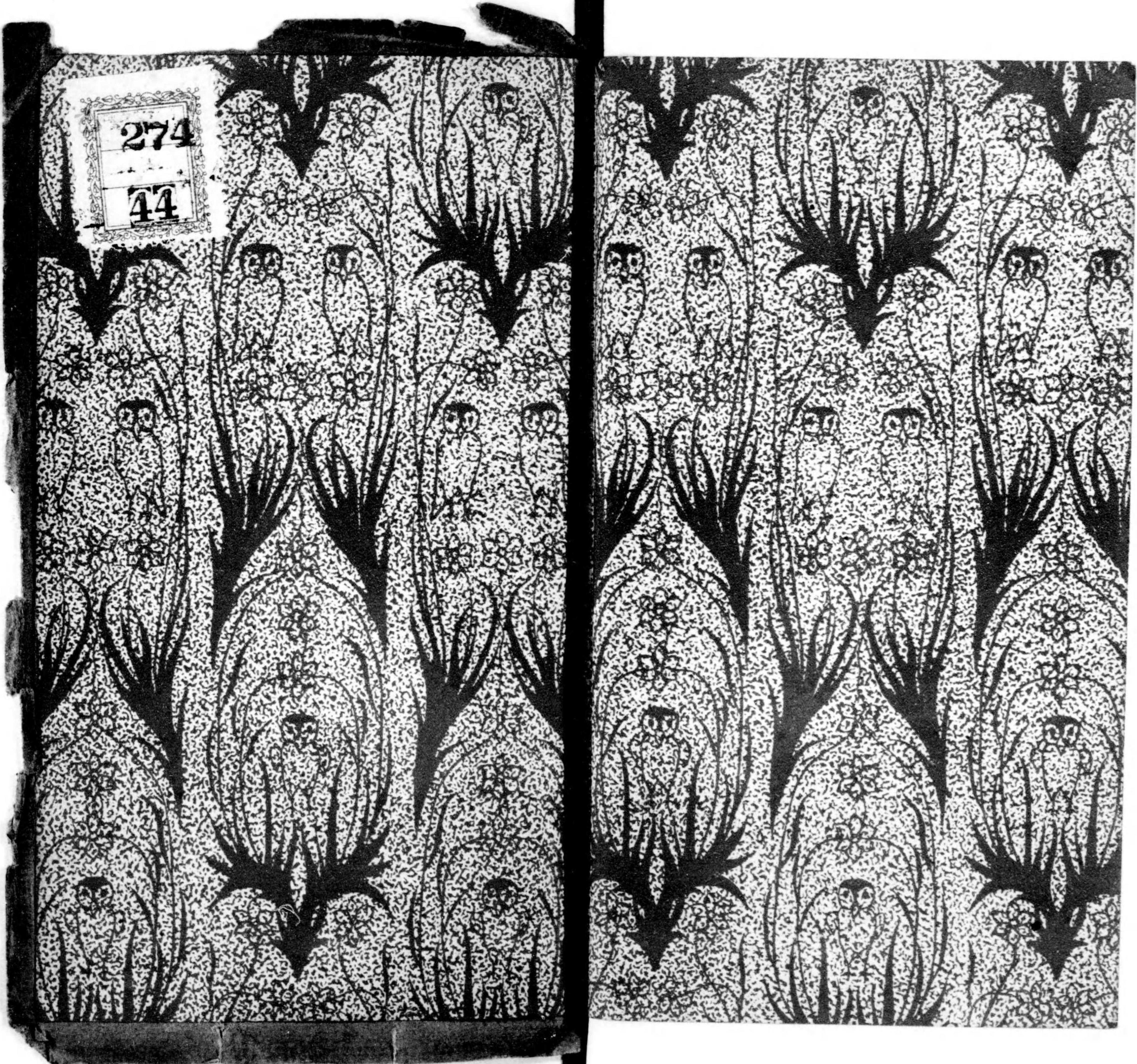
著 村 藤 崎 島

集 詩 村 藤 袖 珍

(裝 表 作 英 田 和)

明治文壇に於ける『藤村詩集』の價値は、今新しく説かず、年一年熱心なる愛讀家の同情益々増加し、賣行依然として多大なるに知るべし。
今回著者の新たなる訂正を加へ、『若菜集』時代の小照を添へ、袖珍型の新裝を凝らし大正文壇に薦む、また絶好の記念ならずや。

錢 八 金 料 送 錢 拾 八 金 價 實
(版 三 訂 改)



274

44

終

